

# 江刺の稲

「江刺の稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。全く管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。「江刺の稲」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。

編集長 昆 吉則

## ヤレなかったのか？ヤラなかったのか！ 1月22日、黒木安馬氏と氣勢を上げよう

「ヤレなかったのか？ヤラなかったのか！ 人生御一人様一回限り！」  
本誌の巻末で連載をお願いしている黒木安馬さんのお得意のフレーズである。

黒木さんとは彼がJAL時代、30年くらい前からの付き合いだ。最近は大失礼してしまっているが、彼と一緒にのときは、いつも飲んで食ってまた飲んで、さらに飲んで笑い合ってきた。

「はったり八割、ウソ二割」などと言いつつも、自らスコップを使って千葉リーヒルズの自宅にプールを作ってしまう黒木さん。JAL退社

後も「相互啓発全国勉強会3%の会」を立ち上げ、全国を走り回り元気と勇気を振りまいている。

今月号で黒木さんが食道がんの全摘手術を受けたことを書いている。2カ月に及ぶ入院生活でもお医者さんたちが彼の病室に集まり、「薬食同源」をテーマに勉強会を開いていたとか。

その間もFacebookほかで発信を続け、まったくくじけた様子がない。

そもそも黒木さんの人生には「挫ける」なんて言葉は用意されていないのだろう。

『出過ぎる杭は打ちにくい！』（サンマーク出版）と叫び、『面白くなければ人生じゃない！』（ロング新書）と確信犯の前向き人生を歩み、そして自ら主宰する3%の会を通して、人々に福音を与えてきた。なんとがん手術から復帰してからも、すぐ全国を走り回っている。

ところで、いよいよ日本の農業が変わりそうだ。全中・全農と自民党の談合も済んだのだろう。TPPも大筋合意した。というより、政策が変わって農業が変わるのではなく、我々が何をすることで農業政策が変わってゆくのだということがいよいよ明白になってきた。

まさに、農業経営者には「ヤレなかったのか？ヤラなかったのか！」が問われる時代となったのだ。

財務省の批判を待つまでもなく、法外な交付金をばらまいて行なわれている飼料米政策は、数年後の平成30年（2018年）、あるいは32年（2020年）をめどに大幅な変化がある

だろう。それどころか、夏の参議院選挙が終われば風向きは大きく変わる。

変化には当然のことながら困難も伴う。でも、それ以上に農業経営者がこれまで取り組めなかったこと（取り組みなかったこと）に思い切ったチャレンジできる社会的環境も整ってくる。

その一方で、コメの供給過剰は今後も続き、コメに偏重した経営はリスクが高まる。

しかし、水田農業経営者には水田への畑作技術体系の導入（水田イノベーション）と子実トウモロコシ生産という選択肢がある。需要家サイドも動いてきた。政治、行政も放っておかない。

あとは皆さんの「ヤレなかったのか？ヤラなかったのか！」である。それはまさに、お上に頼むことなく「自己責任」。

1月22日に本誌読者の会の賀詞交歓会に、講師として黒木安馬さんをお呼びして氣勢を上げます。農業新時代が始まる年に、黒木節を聞きながら明るく元気になりませんか。たくさんの方のご参加をお待ちしております。